

LIFE
IS A
beautiful
RIDE



LIFE

2020

実践レポート集



社会福祉法人 太樹会 第10回実践発表会

中期経営計画2022

2017年4月～2022年3月の5ヵ年計画

4

専門性と支援の質の追求



和里（にこり）

Page	Title	Department
4	認知症ケアマッピングのフィードバックを受けて～行動計画の立案からケアプランに繋げる～	二上ユニット
5	安全・安楽な移乗支援	三輪ユニット
6	食事提供の工夫で「生きる力」を引き出す	吉野ユニット
7	客観的な数値に基づく尿取りパッドの選定	高円ユニット
8	エゴグラムの活用による自己覚知	飛鳥ユニット
9	コロナ禍における看取り支援の振り返り	白虎ユニット
10	Aさまの看取りについて（口腔内の清潔で感染症や発熱を予防する）	玄武ユニット
11	福祉用具活用における腰痛予防と活用までのアプローチ	朱雀ユニット
12	より良いユニットを創るための意見交換～「元気高齢者」が活躍できる場所～	青龍ユニット
13	ショートステイにおける生活環境と社員のかかわりの検討アンケート結果からの考察	龍田ユニット
14	歩行する機会を増やし在宅への生活につなげる	葛城ユニット
15	記録業務の効率化を目指す	デイサービスセンター
16	働き方改革における医務室スタッフの現状調査	看護
17	自分で施設内を散歩できるようになった大山和子（仮名）さまとのかかわり～和里（にこり）における機能訓練とは～	機能訓練
18	Webサイト・SNSに関する一考察 - Webアンケートシステムの試行結果 -	総務
19	コロナ禍における在宅生活の現状把握	ケアプランセンター
20	福祉のイメージについてのアンケート調査～PR隊活動に繋げるために自事業所の傾向を知る～	相談



和里（にこり）香芝

21	食生活の改善	大和ユニット
22	良い睡眠のためにできること～生活者に合った尿取りパッド選び～	天羽ユニット
23	食器の色彩によって食事に及ぼす影響	飛龍ユニット
24	オンライン面会の効果	万葉ユニット
25	デイサービスにおける音楽レクリエーション（体操）の取組がもたらす発展性と考察	デイサービス
26	生活者の好みに応じたおやつを用意できる環境をつくるためにタブレット端末や新聞折込チラシを活用した嗜好調査を行う	栄養



和里（にこり）香芝Ⅱ

27	口腔ケアで口腔内を刺激して唾液分泌量を上げる	耳成ユニット
28	汚染を減らして生活者の負担を減らしたい	畝傍ユニット
29	半構造化のヒヤリングを通して生活者の思いを知る	香具ユニット



新入発表

30	和里（にこり）®に入職しての1年	グエン・トゥ・トウイ	飛鳥ユニット
31		加藤 基	デイサービスセンター
32		グエン・トゥ・ハー	飛龍ユニット
33		グエン・ティ・ガーン	耳成ユニット



評価結果

前期

Rank	Department	Title	Page
1	和里（にこり） 龍田ユニット	ショートステイにおける生活環境と社員のかかわりの検討 アンケート結果からの考察	13
2	和里（にこり）香芝II 耳成ユニット	口腔ケアで口腔内を刺激して唾液分泌量を上げる	27
3	和里（にこり） 看護	働き方改革における医務室スタッフの現状調査	16
4	和里（にこり）香芝 栄養	生活者の好みに応じたおやつを用意できる環境をつくるために タブレット端末や新聞折込チラシを活用した嗜好調査を行う	26
5	和里（にこり） 青龍ユニット	より良いユニットを創るための意見交換 ～「元気高齢者」が活躍できる場所～	12

高円ユニット / 三輪ユニット / 玄武ユニット / デイサービスセンター和里（にこり）
 デイサービスセンター和里（にこり）香芝 / 天羽ユニット / 万葉ユニット / 香具ユニット
 の皆さま発表ありがとうございました。

後期

Rank	Department	Title	Page
1	和里（にこり） 機能訓練職	自分で施設内を散歩できるようになった大山和子（仮名）さまとの かかわり ～和里（にこり）における機能訓練とは～	17
2	和里（にこり） 総務	Webサイト・SNSに関する一考察 - Webアンケートシステムの試行結果 -	18
3	和里（にこり） 白虎ユニット	コロナ禍における看取り支援の振り返り	9
4	和里（にこり） ケアプランセンター	コロナ禍における在宅生活の現状把握	19
5	和里（にこり） 二上ユニット	認知症ケアマッピングのフィードバックを受けて ～行動計画の立案からケアプランに繋げる～	4

飛鳥ユニット / 吉野ユニット / 朱雀ユニット / 葛城ユニット / 相談職
 大和ユニット / 飛龍ユニット / 畝傍ユニット

の皆さま発表ありがとうございました。



和里（にこり）
二上ユニット

他者との交流を深める
趣味活動の時間を増やす

認知症ケアマッピングのフィードバックを受けて ～行動計画の立案からケアプランに繋げる～

背景

高齢者の社会への参加は現在の日本でも着目されている。なかでも高齢者施設における社会参加は重要とされている一方で、「人手不足感がある」といった社員本位の理由により、社会的なかかわる機会が不十分になっている現状である。

さらに、新型コロナウイルスの感染予防対策により、クラブ活動や外部への社会参加といった活動が相次いで中止となり、さらに機会が減少している。

2020年10月、認知症ケアマッピング（以下、DCM）の機会を設けた。生活者の暮らしは「食事」「排せつ」「寝る」「テレビを見ている」といった行動カテゴリーの時間がほとんどを占めており、社会参加はあらか活動が著しく少ない結果であった。

また、DCMのフィードバックより、現状の生活者にとって他者とのかかわりが食事・排せつといった支援職による三大介護に関する時間が大半を占めることとなっていた。

他者との交流の少なさは、認知症の進行や発語機会の減少による嚥下機能などの口腔状態の悪化も引き起こす可能性がある。

次年度はエビデンスに基づいた自立支援・重度化防止の推進に向け、取り組む必要がある。

目的

本稿では、「社会参加」を「身体的・精神的に孤独ではなく、愛着のある人や物とかかわること」とし、生活者一人ひとりの暮らしにおける、他者との交流や趣味活動の時間を増やし愛着、結びつきのニーズを満たすことで社会的な結びつきを実感していただくことを目的とする。そのため、DCMのフィードバックから行動計画の立案を実施することとした。

認知症とともに生きる人たちの
心理的ニーズをよりいっそう満たす



※本図は認知症ケアマッピングの活用、生活者の暮らしをよりいっそう満たすための取り組みの一環として作成されたものであり、具体的な実施内容は各施設の実情により異なります。

対象

二上ユニット生活者の3名

- ① 山田さま（仮名）女性 要介護4
- ② 田中さま（仮名）女性 要介護3
- ③ 上田さま（仮名）女性 要介護5

効果・考察

趣味や習慣を活動として取り入れることで、楽しみながら社会参加のきっかけをつくることができる。

特に、趣味や好きなことを共通している生活者同士で活動できれば自然に会話へとつながる。

社会参加は生活者の趣味や生活歴だけでなく、DCMを通して得られた、気づきからも様子をうかがうことができた。

「人手の不足感がある」といった現状は一見、社会参加活動ができないように感じる。

しかし、生活者とのかかわりや観察を通して、ご本人の満足度が高まる社会参加活動を提供することができる。

今回は愛着や結びつきに焦点を当てたが、すべてのニーズを満たすように近づけることが大切である。それを見出すためにDCMは有効であったと考えられる。

取組

二上ユニット支援員4名でミーティングを実施し、生活者個々の実現可能な社会参加について可能な支援内容を検討する。

その後、ケアマネジャーとカンファレンスを行い、行動計画を立案する。

倫理的配慮

対象の生活者及び家族に対して実施内容について口頭で説明し同意を得た。

和里（にこり）

三輪ユニット

安全・安楽な移乗支援

安心してケアを受ける
福祉用具による負担軽減

背景

入居されている三輪花子さまは、身長155cm、体重66.3kgと体格が大きく、移乗支援時に支援員やご本人に負担のかかることがあった。

例えば、移乗するときにご本人が「痛い」と表現されるなどの現状があり、改善する必要があると考えていた。

現在、和里（にこり）では様々な福祉用具が準備されている。

使用すれば非常に移乗支援などがスムーズにできる。

しかし、福祉用具を使用するには「時間があったくない」「なくてもできる」とせっかく購入された物を使用せず、支援員によって支援方法がバラバラであった。

そこで、福祉用具を適切に使用することで支援員の身体の負担を軽減できるとともに、生活者ご本人も安心して支援を受けることができると考えた。

目的

本稿では、福祉用具の「スライディングボード」を活用し、福祉用具がもたらす安全・安楽な移乗支援について考える。



対象

三輪花子さま、90代、女性、要介護5

効果・考察

取組

作業療法士からスライディングボードの指導（三輪ユニットの支援員3名）

6月22日からスライディングボード使用
スライディングボード使用に関するアンケートを3名に行った

（アンケート配付は8月10日、回収日は8月18日）

倫理的配慮

取り組みを行うにあたり、生活者本人、家族に内容の説明を行い、個人情報保護及び秘密保護を行うことで同意を得た

以前からスライディングボードを使用していた支援員が過半数を占めていたことや「今後、福祉用具を使用していきたいですか？」の質問に対し全員が「はい」と答えていることから、実際に支援する近くに福祉用具があったり、福祉用具の簡単な知識や使用方法を分かっていたりしていれば、自ら使用しようと思うのではないかと考えられる。

支援員の負担感を軽減できているということは、楽に支援できているということであるため、生活者本人も楽に移乗できていることにつながると考える。そのため、福祉用具の正しい使用方法などを専門職から継続的に指導してもらうなど、連携を図ることが重要であるといえる。

今後の課題として、スライディングボード使用時の生活者本人の観察を行い、安全・安楽な移乗につながっているかを考えたい。

和里（にこり）
吉野ユニット

安心感のある居場所
信頼関係

食事提供の工夫で「生きる力」を引き出す

背景

「食」は命をつなぐものであり、生きるためだけに栄養をとる行為ではない。

「生きる力」を引き出す、なくてはならない大切なものである。

生活者をよく知ることで、望んでいる生活の一部としてどのような食事を求めているのかを伺い、知ることができる。

対象者は、食事中に口の中に食べ物を入れた後、しがんで出されることが多くみられる。

ご家族にお聞きしたところ、ご自宅で生活されているときから、しがんでいたことが判明した。

入居前に入院されており病院では、やわらか食だったため、入居後もやわらか食を提供していたが、食事の種類が限られるため、現在では普通食を召し上がられている。

ご飯やパン、ご家族が持参されたキャラメルやおかきなどのお菓子は出されることがない。

ご本人に理由をお聞きしたところ、「飲み込めなくてかなんな」との言葉が聞かれた。

目的

しがんで出されることなく、飲み込む苦痛を和らげる方法を考えることを目的とした。

対象

佐藤華さま（仮名）

普通食、ご自身で箸を使って召しあがる

総入れ歯

取組

義歯不使用時の食事状況を暮らしの総合記録シートに記入（11月28日から12月4日まで）

義歯使用、3cm×3cmほどに切った魚にユニット内で作った鰯かけをつけて提供

葉物、ゴボウなどの繊維物のサラダを細かく刻み、少量のとろみを全体にふりかけ、混ぜたものを提供（2021年1月4日～1月10日まで）

倫理的配慮

ご本人やご家族に取り組みの説明と個人が特定される形では発表しないことをお伝えし、同意を得た。



効果・考察

冷たい副菜、ゴボウやほうれん草の和え物は、手をつけずに残されることが多かった。

見た目ですぐ「固い」「食べにくい」と思われるものは手をつけなかったのではないかと。

魚は焼き魚をよくしがんで出されていた。食べたときにパサパサと口の中に残るからではないかと。

いつもと違う食感、歯ごたえに違和感があったため残されたのではないかと。

今回は生活者1名だけだが、ユニットの生活者一人ひとりにも目を向け、食事の時間を苦痛、「生きるため」ではなく、楽しみになるように「生きる力」を引き出すことに繋げていきたい。

また、食材によって食べるときと食べないときのムラが見られたため、周りの環境にも影響があるのか、広い視点で試していきたい。

和里（にこり）
高円ユニット

排せつ支援の向上

客観的な数値に基づく尿取りパッドの選定

背景

現在、当ユニットでは、生活者が使用する尿取りパッドについて数値的な基準はない。新規入居の際などに尿測はしているが、尿取りパッドの選定については、社員の経験や感覚的なものが大きい。

合っていない尿取りパッドは、生活者の不快感や排せつの失敗にもつながる。また、コストの面でも無駄が生じている可能性もあった。



目的

生活者の尿量や尿取りパッドの吸収量のデータを取り、それに基づいて尿取りパッドを選定することによって、生活者の不快感や排せつの失敗を解消することを目的とした。

対象

高円太郎さま
日中、夜間ともに尿取りパッドとリハビリパンツを着用、尿意はない。日中はトイレ支援、夜間パッド交換。
日中は平均3枚、夜間は平均2枚使用。

取組

5月6日～5月12日、尿量測定。
尿取りパッドの吸収量を測定。
使用する尿取りパッドを見直し、1週間尿漏れが無いことを確認した。

倫理的配慮

本人と家族に調査について説明し、個人情報を守ったうえで報告書などに記載することについて同意を得た。

効果・考察

尿取りパッドを変更したことによる排せつの失敗はみられなかった。

また、意思表示の難しい生活者ではあるが、表情や行動など尿取りパッドを変更したことによる不快な様子はみられなかった。

支援職の立場では「尿漏れがないように」との思いが強く働き、大きめの尿取りパッドを使用しがちである。

もちろん尿量だけが尿取りパッドを選定する際のすべてではないが、今回の結果は指標の一つにはなると考える。

コスト面でも一枚の差は小さいが、それが積み重なった数字を出すことでかなり大きな金額になることを実感し、考え直す機会にもなった。

エゴグラムの活用による自己覚知

背景

支援員は、生活者の暮らしを支える観点から、人間関係が非常に重要である。

良好な人間関係を築く第一歩は、まず自分自身を知ることである。

交流分析とは、アメリカの精神科医エリック・バーンによって開発された「自分自身が本来持っている潜在能力に気づき、その能力を発揮するのを妨げているいろいろな要因を取り除いて、本来自分自身が持っている能力の可能性を実現する理論と技術」である。

交流分析をもとに、ジョン・M・デュセイが考案したエゴグラムの自己分析によって「具体的な人間関係・コミュニケーションの問題点」が改善しやすくなる。

エゴグラムの活用により、自分自身のよい部分、よくない部分、特性を知り、よい部分はよりよく、よくない部分は改める機会となる。

態度や感情を意識してコントロールすることで、生活者へのよりよいかかわりへのきっかけとなる。

目的

田中支援員（仮名）を対象にすることにより、将来的に個々のユニット支援員の人財育成に役立てることを目的とした。



対象

田中支援員（仮名）

効果・考察

エゴグラム結果

タイプの解析「逆N型」

(CPI4, NPI3, AI5, FC17, AC4)

取組

対象者にエゴグラムを実施し、結果とともにフィードバックを行う。

対象者にエゴグラムやフィードバックを受けてのアンケート調査を実施する。

(12月1日～20日)

エゴグラムのフィードバックにより、対象者は、自分自身の特性を知ることができ、相手のことも考え、生活者、支援員ともによりよい関係を築くための課題が見られたことから、行動変容のきっかけに繋がったと考える。

また、アンケート結果にて自分の目指している方向へ進めていることが客観的に確認できたことから達成感を得ることができ、今後のモチベーションアップにも繋がったのではないかと考える。

以上のことから、自己覚知の重要性が認識できた。

今後、支援員育成への活用についても有用であると考えている。

倫理的配慮

対象者に活動の目的を説明し、個人を特定できない形で発表することを口頭で同意を得た。

コロナ禍における看取り支援の振り返り

背景

2019年11月末頃より、全世界で新型コロナウイルス（以下、コロナ）が流行し、2021年3月現在もコロナ禍と言われている。

医療・福祉業界でもコロナの影響は大きく、当事業所でも、訪問制限(緊急な場合を除く)を含む感染対策が徐々に実施された。

対象者は、看取り支援を開始した直後にコロナが流行し、訪問制限の緩和・強化を繰り返す中での初めての看取り支援となった。

看取り支援からグリーンケアまでの過程で、【本人の意思確認】と【家族の気持ちにも寄り添う】ことが重要だと言われている。

対象者は入居当初から、「最期は家族み～んなに囲まれて死にたい」と話されていたが、訪問制限の渦中により、家族が最期を看取することは叶わなかった。

葬儀を終えた家族から、「母のことを本当によく知ってくれていて、『ここはええとこ、み～んな優しい!』と母もよく言っていました。家族の私たち以上にいつも傍に居てくれたから、母も私達も安心して、安らかな母らしい顔で最期を迎えられたんだと思います」との言葉があった。

目的

コロナ禍で訪問制限がある中でも、家族が安心して対象者の最期を迎えられたのは何故か、今一度、コロナ禍における看取り支援を振り返ることを目的とした。



対象

小田英子さま（仮名），90歳代

2012年4月5日に入居。2019年10月末頃より、むせこみが増え、食事量も低下。本人の「痛いことはしたくない!ここに居たい」との意思もあり、11月22日より看取り開始。2020年5月7日に永眠。

効果・考察

(1) 関係性の構築

看取り支援には、関係性の構築が重要だと考える。本人の安心した暮らしが前提になり、本人の姿を見て家族も安心する。コロナ禍の訪問制限がある状況下だからこそ、安心感を提供が重要と考える。また、「最期の時間をゆっくり過ごせた」との家族の言葉には、亡くなる前日に家族と小田さま同席で思い出話をした。最期のこの時間が家族、本人、支援員にも心に残る時間であり、関係性の構築が再確認できる機会だったとも考える。

(2) 情報収集の重要性

看取りにおいて、自分の意思を伝えられる間に、知ろうとする努力も大事なのではないだろうか。家族が看取り支援を選択する際、本人の意思を、日頃から家族に知っておいてもらうことで選択の判断材料になるのではないだろうか。これらを意識していたことで、ご家族からは「親孝行ができた」と言っていたまでの看取り支援を提供できたと思う。

取組

2021年1月24日、家族に電話での4項目のヒアリング調査を実施。

2021年1月25日、ユニット支援員4名に4項目のヒアリング調査を実施。

倫理的配慮

対象者の家族および社員に研究の目的、個人が特定されないよう配慮することを口頭で説明し同意を得た。

和里（にこり）
玄武ユニット

個人の尊重
楽しく暮らす

Aさまの看取りについて (口腔内の清潔で感染症や発熱を予防する)

背景

人生の最期を安らかに過ごす場所の選択として、特別養護老人ホームを選択されることが多くなってきた。特別養護老人ホームで生活をされている方の中には、病状などにより看取りを希望される生活者がおられる一方、体調などにお変わりなく過ごされる生活者もいる。

その中で、余命宣告を受け、看取りとなった対象者がその人生の最期を安らかに過ごす場所として当ユニットを選んでくださった。

私たちは、対象者と家族に対して、果たして何ができるのであろうかと考えたときに、家族より、「口の中に痰が溜まっていて、また、以前のように歯医者さんに診てもらえないかな」との希望があった。

目的

多職種と連携し、口腔内の清潔保持を行い、対象者や家族の不安を和らげることを目的とした。



対象

高田玄さま、入院後、主治医より胃瘻造設の勧めがあるが、家族は拒否。看取りとなるが、馴染みのあるユニットでの看取りを希望し退院。退院後、筋肉の硬直により口を開けたまま閉じられることがなく、口腔内の乾燥や痰、口臭が強い。

取組

歯科往診時に相談、指導を受ける。

口腔用スポンジにジェルを塗り潤わせる。
うがい薬を薄めスポンジに含ませ水分を切ったのちに口腔内にあてがい少しずつふやかす。その後、歯ブラシ使用

乾燥を防ぐため居室内に加湿器を設置する。
(5月22日～6月10日)

倫理的配慮

対象者や家族に取り組みの説明を口頭でおこない、資料は施設内外での発表に用いることの同意を得た。

効果・考察

看取りとなられた対象者に対して、多職種連携で口腔ケアを実践した。

家族より「退院後は3週間、もっとも1か月と言われました。覚悟はしています。子どもも自然な形でいかせてあげたらと言っていました」「病院も施設もダメだったら、家で引き取りようと思っていた。ユニットで見てもらえて本当によかった。ありがとうね。(本人も)喜んでいるわ、得心している、ありがとうね」との言葉をいただいた。

このことから、家族の身体的・精神的負担や不安を少しでも取り除くことができたと考えられる。

今回の取り組みを踏まえて、看取りの生活者を含むすべての生活者に対して、口腔ケアはもちろんのこと身体的支援や精神的支援を実施する際には、多職種連携に努めたいと改めて強く思うことができた。

福祉用具活用における腰痛予防と活用までのアプローチ

背景

現在、介護職における腰痛の有訴率は、60%～82%と高い数字を示している。

また、腰痛予防対策指針によると、人力のみで重量物を持ち上げるときには、満18歳以上の男性では、体重のおおむね40%以下の重量までとなっている。また、満18歳以上の女性では、男性の取り扱える重量の60%位までとなっている。

これらに従うと、体重60kgの男性では24kgの物まで、同体重の女性では24kgの60%にあたる14.4kgの物までしか持ちあげることができないとされている。

2人で持ち上げる場合でも、力が均等に分散されると仮定して、同体重の女性では28.8kgの物までしか持ち上げることはできないとされている。

これに対し、「リフトを使用することで介助者の腰部負担は軽減された」と報告されている。

対象者は身長161cm、体重50.5kgである。端座位は不可、車椅子移乗に全支援である。

移乗する際、対象者から「痛い」という言葉が聞かれる。また、右片麻痺による亜脱臼のリスクを伴うため、支援員は持ち上げる際の身体的負担（腰痛）と生活者の痛みの訴えによる心理的負担があり、改善する必要があると考えた。

目的

移乗時の負担が大きい対象者と支援員を対象に、福祉用具「吊り上げ式床走行リフト」を活用することにより、支援する側もされる側も、身体的、心理的負担の軽減を目的とした。



対象

田中一郎さま（仮名）、男性、80歳代、要介護4
日常生活自立度Ⅲa

朱雀ユニット支援員4名

効果・考察

対象者はリフト導入前の聞き取り調査で「機械は怖い」といった言葉が聞かれた。リフトの目的と利点をリフトを見て、動画を通して数日かけて説明を行った結果、同意を得ることができた。

「恐怖」は、吊り上げてからベッドまたは車椅子まで移動する距離と時間によって、恐怖心が生まれると考えられた。そこで、ベッドまたは車椅子とリフトの距離を平行することで距離と時間が最短になった。

また、リフト導入後も使用するときは直前ではなく事前に伝えることで、「抱えられると痛みと不安があったが、ちゃんと機械を使ってくれれば安心できる」とリフト使用に関して拒まれることがなくなった。

支援員のリフト体験は「足が締めつける感じ」などを理解できたが、「リスクへの不安と腰への負担は、リフトで軽減した」との言葉からもリフトは定着できると考える。

取組

田中一郎さま（仮名）

支援員と作業療法士による、リフト使用についての事前説明と動画の視聴、聞き取り調査を行い、同意を得る。

支援員

使用法の指導とリフト体験を実施した。

倫理的配慮

対象者および家族に趣旨と個人情報の保護や秘密保持について口頭で説明し、同意を得た。

和里（にこり）
青龍ユニット

尊厳を守り安心して過ごせる
それぞれの楽しみとつながり

より良いユニットを創るための意見交換 ～「元気高齢者」が活躍できる場所～

背景

2025年には、介護職は37.7万人不足する恐れがある。厚生労働省が介護人材確保に向けた考えとして、中核的人材の専門性を高めるとともに、人材のすそ野を広げ、多様な人材の参入促進が掲げられている。

当ユニットでは、社員が退職後に人員補充が思うようにすすまず、人手不足感(常勤換算3.35)のため、残業が多くなり支援員が疲弊していた。生活者からも「一人で忙しいやろ?」「前はもっと人が居てたのにね」との声が聞かれることがあった。

当法人ではパーソン・センタード・ケアを価値基盤にしている。しかしながら、認知症などと共に暮らす、生活者の想いに合わず時間がなかなかとれず、支援員のジレンマがあった。そのような中、奈良県福祉人材センター主催の「未来の職場とつながるカフェ」に参加し、職場体験をされた元気な高齢者が配属された。元気な高齢者とは65歳以上で、介護保険の介護認定を受けておらず、地域活動への参加が可能な方と定義(以下、支援職(補助))されている。専従支援員は疲弊しており、支援職(補助)と一緒に働くことが初めてで、仕事内容で互いの思い、考えていることに相違があり、戸惑いがあった。支援職(補助)は、支援できる生活者とできない生活者がいるため、生活者が安心して暮らすためには、支援職(補助)がユニットで働くためにどのような働き方が適切なのかを考えることが必要であった。

目的

社員それぞれの思いを把握し、支援職(補助)の仕事内容が共通の認識になることを目的とした。



対象

専従支援員5名
75歳の支援職(補助)1名

効果・考察

取組

対象者にインタビュー調査およびユニット
会議で意見交換
5月23日～8月31日

生活者からは「いつもお花をきれいに飾ってくれてすっとうれしい」「話ができてユニットの中が明るくなって気持ちよく暮らせる」そして、支援員への人手不足感の心配よりも安心感の言葉を受けた。気持ちよく過ごせる環境を作るためには、自分の意見を伝える、聞く場が必要だと感じた。

各自の思いを調整することで、互いに責任をもって自分の仕事ができ、互いの仕事の役割を把握し、協力することで生活者の1日の暮らしが安心したものとなる。

生活者や元気な高齢者の生きがい、居場所づくりになり、休日は支援職(補助)が傾聴ボランティアもおこなっている。

福祉人材センターとの繋がりで地域の支え合いを感じることもできた。手助けしてくれる人がいると人手不足感があっても少し疲弊は和らぐと感じた。

個人の尊厳が尊重される多様な人材の参入促進が期待できるのではないかと今回の取り組みで感じた。

倫理的配慮

インタビューは個人が特定されることのないよう、協力は任意であること、個人情報保護について口頭および紙面で説明し、同意を得た。

和里（にこり）
龍田ユニット

安心して暮らせる場
笑顔で過ごせる日々

ショートステイにおける生活環境と社員のかかわりの検討 アンケート結果からの考察

背景

私たちが感じているストレスには人間関係の問題などの心理的ストレス以外に、音や明るさ、温度など環境によるストレスがある。ストレスを感じると脳の扁桃体が興奮し、自律神経のバランスを乱す信号を送るため、胃が痛くなったり眠れなくなったり、疲れが回復しなくなったりする。

対象者は、2019年12月16日から2か月間の入院生活を経て、2020年2月12日ショートステイ連続利用開始となり、生活環境が短期間に2度変化した。

対象者は利用開始当初、食事をほとんど召し上がらず、支援員の言葉かけに対して「いらん、いらんて」と、表情をこわばらせておられた。

また、以前から精神的ストレスを感じると息が荒くなる、とキーパーソンである長女から伺っていたが、利用1週間で2度、呼吸促進がみられた。昼食後から夕食前の時間帯に、椅子から立ち上がって周りを見渡して何かを探すような仕草が頻繁に見受けられた。

心穏やかに過ごしていただくことでキーパーソンから伺った、足を組み手は頭の後ろで組んだり、リビングの長座布団の上で横になるというリラックスしているときのサインが増えること、社員が対象者のサインに気付くことができるようになることで対象者の理解に努めることとした。

目的

対象者が落ち着ける空間をユニット内に整え、社員のかかわりで心穏やかに過ごしていただくことを目的とした。



対象

龍田葛子さま、70代、女性、要介護4
日常生活自立度Ⅲα

効果・考察

物的環境と人的環境のどちらかを整えるだけではなく、両方を考えていかないといけないと感じた。また、今回は対象者に関して取組みをおこなったが、ショートステイを利用してくださっている方、それぞれの居心地の良さも最適化し考えていく必要があると感じた。そのためには、今までの生活歴も大切だが、それに頼るのではなく今の本人が何をどう感じておられるのかをよく見るのが大切で、社員のかかわりがとても重要になることがわかった。

今回は、在宅からショートステイへの変化だったが、今後ショートステイから特養への変化もある。本人や家族にとって何が最適なのかは人それぞれなので、本人の思う安心や心からほっとできる環境作りを入居後も引き続き実践する必要がある。ショートステイでの本人の様子を見て事業所を選んでくださった期待や、本人を思う家族の気持ちにこたえることのできるようなかかわりを今後も続けていきたいと思う。

取組

特別養護老人ホームにおける個別ケアのガイドラインを用いて、落ち着ける空間をユニット内に複数箇所整える。

5月1日～6月30日、リラックスできる場所で過ごせるようかかわりをもつ。

利用直後と現在の様子を家族にアンケート実施。（「利用直後の本人の様子」「現在の本人の様子」「気付いた点」）

倫理的配慮

対象者および家族に趣旨を口頭で説明し、同意を得た。また個人情報の保護や秘密保持に配慮したうえで、得られた情報は目的以外で使用しないこととした。

歩行する機会を増やし在宅への生活につなげる

個々にあった支援
個人の尊厳を守る

背景

対象者の家族から「最近、自宅で歩けなくなって座り込んでしまった。」と話を伺った。

また、対象者へ、移動の際「歩きますか？」と伺ったとき、「歩きたいわ。」と返答を聞くことが多かった。

和里（にこり）では、ほぼ段差の無い環境で過ごされるが、自宅は施設と違い、段差が多くあるため、このままでは活動できる範囲が狭まってしまい、家族の介護負担が多くなる可能性があった。

「歩行」をすることは、自身の活動範囲が広がるだけでなく、自身の意欲や活力にもなる。

目的

ショートステイ利用中に歩行の機会を増やすことで、下肢筋力が維持・向上し、在宅介護の負担軽減に繋げることを目的とした。



対象

山口 利子さま（仮名）、80代、女性
認知症、高次脳機能障害、くも膜下出血、水頭症、
腰椎圧迫骨折、腰椎椎間板ヘルニアなど

効果・考察

本人からは歩行の言葉かけやマッサージ師が来た際、「もうええ」と少し疲れるとの話もあり、歩行ができる機会が減っている。

ベッドからの立ち上がりの際は高さの調節をし立ち上がりやすいように感じると社員からも話があった。実際に1回で立ち上げられる日が多く見受けられるようになった。

リビングからトイレまでの歩行は本人から「いらん」との希望が多いため、実践できないこともあった。

自宅での生活時、座り込みがなかったことから、家族の心理的負担は軽減したのではないかと。しかし、対象者にとっては、身体を動かすことが身体的・心理的につらくなってしまっていることを知った。

今後もマッサージ師にも助言をもらい、本人の身体的・心理的苦痛が伴わない支援を考えたい。

取組

マッサージ師に歩行時の注意点や日中の過ごし方の助言をもらい実践。

床からベッドマットまでの高さは、51cmが立ち上がりやすいため座面調整。

13時の排せつ時に支援員2人にてリビングからトイレまで歩行。

帰宅時の状況を家族に電話で聴取する。

（10月26日～11月15日）

倫理的配慮

対象者、家族に実践の趣旨を電話にて説明し同意を得た。また、個人情報の保護に配慮したうえで得られた情報は目的以外で使用しないこととした。

記録の効率化を目指す

自立支援
在宅生活の継続
重度化防止

背景

今回の実践発表テーマを決めるにあたり日々の職務の中で、記録にあたるものが比較的多いことから、通所日誌や連絡帳作成の部分に焦点を絞ってみることにした。

現在の記録ソフトに更新することで最初にペーパーレスを行い、記録の効率化・簡素化を図り、記録に携わる社員の心理的負担や使用する紙の量を減らすなど、コスト削減を目指すはずであった。

しかし、実際は用意されたタブレットなどの機材を使うことが少なく、記録ソフトが変わってもデイサービスセンターのフロアでは、所定の用紙に書き残したり、口頭伝達による記録が続けられていた。

そのため、記録ソフトを更新してから1年経過した7月時点でもデイサービスセンターの社員のほとんどが、ソフト内の機能を上手く使いこなせず、記録担当者にとって負担となっていた。

そこで今回の実践発表での取り組みが、記録方法を変えるチャンスだと考えた。

目的

記録の問題点を明確化する。

明確になった問題点をどう改善するのか、そのためのひとつのきっかけをつくる。

記録担当者にかかる時間、負担を減らし効率化を目指す。

記録に関わる人を増やし、記録内容のばらつきを無くす。



対象

デイサービスセンターの社員14名

効果・考察

取組

7月10日～7月17日と8月22日～8月28日に記録やデバイスに関する認識をアンケート調査を実施した。

6月19日～8月20日に記録者のストレス測定（Apple Watchの心拍測定、午前9時～午後4時）を実施した。

記録時間を計測した。

7月25日からタブレット記録を実施した。

ペーパーレスに関して賛成が多数を占めるのはコストカットの面で期待できるためだと考えられるが、必要な情報が確認しにくい問題やデバイスの機能がミスマッチしていたため、慣れた方法での記録に落ち着いたと考えた。

記録ソフトは便利と答えた社員は半数以上であるが、活用できなかったのはデジタル化が「何となく便利」というぼんやりした印象が要因であった。使うようになると不慣れであることの意識が先行することで敬遠しがちになり記録者の負担が増えたと考えた。

社員にタブレットの使用方法や記録の残し方などの指導を行っていたため時間が長かかったことも要因の1つと考えられる。ストレス測定の結果については送迎のための運転の時間も含んでいるために数値も上昇したものもあると考え、本来ならば取組後の数値も下がっていたのではないかと予想される。

倫理的配慮

アンケート対象社員に対して、口頭での説明を実施し同意を得られた社員に実施した。また、研究について管理者の承諾を得て上での実施。

和里（にこり）
看護

尊厳ある看取り
共通認識
暮らしの継続

働き方改革における医務室スタッフの現状調査

背景

2017年3月の「働き方改革実行計画」の発表以来、「働き方改革」は喫緊の課題として多く議論されてきた。

看護職における「働き方改革」とは、個人の事情に応じた多様な柔軟な働き方を自分で選択できるようにすることである。

働き方の意識の多様化が認められ、働き方の選択ができることで、初めて仕事と仕事外の様々な活動を自らが希望するように調和されることだと考える。

今般、医務室スタッフ16名も、時短やダブルワーク、扶養範囲内と働き方はさまざまである。

目的

医務室スタッフの働き方に対する思いを調査することによって、現状や問題点の明確化を目的とした。



対象

医務室スタッフ16名
常勤3名、非常勤6名、ダブルワーク5名、OT2名

効果・考察

今の職場の総合的満足度は、16名中12名が満足していた。

全体の87%が家庭を持っている主婦層であるため、家から近いことや、シフトの調整や休日・有給休暇の取りやすさも満足度へとつながっていると考える。

プライベートも相談できること、多職種との関係性のよさは人間関係に大きく関係し、精神的にも安定した状態を保ち、さらにモチベーションを保たれ、仕事に集中でき、やりがいのある仕事へとつながると考える。これらにより、75%が今後も働き続けたいという結果に繋がっているのではないかと。

少数だが、社員教育・キャリア開発などの制度の充実している、仕事に集中しやすい環境であるの項目で、あまり思わないと答えた人がいることでは、制度の充実を図ることでモチベーションがさらに保たれるのではないかと。

取組

2020年6月5日～6月25日にアンケート調査を実施し、集計した。

1. 今の職場に対する満足度
2. その理由
3. 職務などの満足度
4. 働き続けたいか
5. 悩みや要望

倫理的配慮

趣旨は口頭で説明し、結果は目的以外しようしないこと、個人情報および秘密保持について配慮をおこなうことで同意を得た。

和里（にこり）
総務

最適化
Person-centred Care

Webサイト・SNSに関する一考察 - Webアンケートシステムの試行結果 -

背景

新型コロナウイルス感染者の増加を受け、一部の企業はリモートワーク（在宅勤務）や時差出勤の導入を始めた。

これに関連して、2021年卒および2022年卒の就職活動における選考活動では説明会や面接、インターンシップを中止または延期を決定する企業が多数となった。

この影響もあり、得たい情報を外出することなく自宅でWeb検索する機会が増えており、若年層にとっては、Webサイトから求人情報にアクセスし、申し込むのが主流になってきている。面接時間の調整などもWebサイト上のやり取りで、電話がかかってくることもないため時間を気にすることもない。求職者と企業は、空いている時間に対応ができ、すべてWebサイトで解決してしまうのである。時と場所を選ばず、といった手軽さも魅力なのだろう。

近年スマートフォンの普及につれ、使いやすさもGoogleの検索順位に考慮され、SEOの順位に影響が出ている。また、市場において大半をしめるマイナビやリクナビといった求人サイトが公開されていることを踏まえ、スマートフォンユーザーを狙ったWebサイトの施策を行うことで、制度の高い人材確保を行えると考えられる。

目的

サービス利用案内や人材確保は継続的に必要であることから、Webサイト・SNSの改善点や要望を把握することを目的として、Webアンケートシステムを試行した。



対象

地域住民

効果・考察

取組

2020年12月30日～2021年1月24日にWebアンケートシステムSurvey Monkeyにて、閲覧端末、閲覧目的、主に利用しているSNS、充実すべき情報、属性を調査した。

倫理的配慮

対象者に調査の趣旨について文書にて説明し、結果は、目的以外には使用しないことを伝え同意を得た。また、この発表に関し、開示すべきCOI関係にある企業などはありません。

1. スマートフォン最適化対応の必要性
 - 画面の大きさ、操作方法、通信環境などを踏まえた構成
 - 「利用・入居料金」、「1日の暮らしの様子」などの充実すべき情報の効果的な表現方法は、ベンダーと検討
 - 「1日の暮らしの様子」は、支援のあり方や事業所の様子を手軽に知ることができ、求職者の動機づけにつながる可能性
 - 対象者にとってストレスの少ないWebサイトの最適化が重要
2. 人材確保に向けたSNSの展望と課題
 - 「LINE公式アカウント」の早期活用
 - 「1日の暮らしの様子」などの伝え方の工夫や他法人との差別化、対象者にとって共感を得られるメッセージを伝えることが課題
 - Facebookはブランディング、Twitterはコミュニケーションと情報拡散力、LINEはセールス・プロモーションに適している
 - Webアンケートの定期的な効果測定
 - ITリテラシーのみならず、言語表現力の向上も課題

コロナ禍における在宅生活の現状把握

背景

新型コロナウイルス（以下、コロナ）の感染拡大により、2020年4月7日から5月31日まで全国的に緊急事態宣言が出され、外出自粛が要請された。

これに合わせて、デイサービスなどの通所系サービスの利用を自粛するなどの動きも見られた。

厚生労働省の調査によると、2020年4月のデイサービスの利用者は、3月に比べ3.7%減とコロナ感染拡大前よりも大幅に減少した。

目的

今後も終息するめどがたっていない中で、在宅生活にどのような変化が生じているのか、現状把握をおこなうことを目的とした。

対象

介護保険サービス利用者20名と家族14名

取組

5項目の自由記述式アンケート調査を2020年12月1日～2021年1月10日に実施した。

① 介護保険サービス利用においての変化はありましたか？
② 日常生活で変化はありましたか？
③ 体調や気持ちの変化はありましたか？
④ サービス事業所のコロナ対策でよかったこと、よくなかったことは？
⑤ ご自身でしているコロナ対策は？

倫理的配慮

調査の趣旨について口頭で説明し、本内容は研究目的以外に使用しないこと、個人情報および秘密保持について配慮をおこなうことで同意を得た。

キーワード



効果・考察

(1) 日常生活の変化

利用者の日常生活における変化が少数であったことから、普段の生活において外出の機会が限られているなど、直接的なコロナの影響は少なかったことが考えられる。一方、家族の生活においては、仕事が減り家にいることが多くなったことや、外出を控えるようになるなど、LifeとWorkの両方に変化が生じていることが明らかになった。同居家族でも、生活リズムや役割りの違いによって、コロナによる日常生活への影響が異なるのではないかと考える。

(2) 感染症対策のあり方

サービス利用に関して、事業所のコロナ対策に不安を感じておられる声があったことから、自事業所でも今一度、感染症対策部会が中心となり、マニュアルの共有や感染症対策を周知し、マスク着用や手洗い、消毒などの言葉掛けが必要であると感じた。

和里（にこり）
相談

Person-centred Care
対人援助技術の向上

福祉のイメージについてのアンケート調査 ～PR隊活動に繋げるために自事業所の傾向を知る～

背景

生活相談員業務指針において、生活相談員には、利用相談・他機関・行政との連絡調整・人材育成などの役割がある中で、広報活動を行うことも役割の一つとしてあげられる。

その広報活動として、令和元年から奈良県主催で実施している福祉・介護の仕事の魅力・長所を発信していくPR隊活動に参加している。

まず、福祉に対してどのようなイメージがあるのかを知り、そのイメージを変えていきたいと考えた。

「働く主婦が小学生くらいの子どもに避けてほしい職業」では、介護関連が第5位という結果（働く主婦層、有効回答数1,000件）であった。

そこで、当事業所で福祉に携わる職に就いている社員にも同様のアンケートをおこなうこととし、どのような傾向が出るのか調査をおこなった。

目的

福祉に対してのイメージや意見を確認し、今後の広報活動の活用につなげることを目的とした。

対象

当施設社員127名

取組

2021年1月6日～14日にアンケート5項目を実施した。①もし小学生くらいのお子さんがいるとしたら勧めたい職業、②避けてほしい職業、③介護を子どもに勧めるとすれば職場に対する条件、④福祉の魅力を知っていただくために、どのような発信内容・方法があるのか、⑤介護の仕事でやりがいを感じたことや嬉しかったこと。

倫理的配慮

アンケートで趣旨を説明し、その回答をもって、実践発表などへの使用についても同意を得たものとした。



効果・考察

女性は国家資格を取得することで働く範囲が広がることや、安定している職を求めている。男性は堅い仕事やIT関係が上位に上がっており安定して長く勤められる職を求めていることがわかる。

コロナウイルスが影響し男女共にサービス業が1位となる。景気に左右されることや休みが取れず不規則な職は避けたいと考えている。

女性は人間関係を課題としてあげている。人間関係では自身の意見を受け入れてもらえることや、相談できる環境が整っていることを希望していることがわかる。男性は収入面・身体への負担・福利厚生がしっかりしていることがあげられているため、スキルアップの制度を求めていることわかる。身体を壊さず長く働ける環境があれば福祉に対しての意見も変わってくると考える。福祉の魅力向上にはボランティア活動・実習生の受け入れを行い、生活者との関りを通じて仕事内容を知る機会が必要である。

和里（にこり）香芝
大和ユニット

食生活の改善

個々の意思への配慮
関連部署との関係性

背景

今年で90歳代後半になる大和花子さま（仮名）は偏食がひどく、副食は毎食ほとんど食べずに残していた。少しでも食べてもらえる食材を残した結果、現在は、朝食はパンのみ、昼食と夕食は、米飯+副菜1品+納豆となっていた。

副菜は、ほとんど食べずに残してしまうので、実質、毎日パンと米飯と納豆しか食べていない。

それでは栄養が偏るので、管理栄養士より栄養補助飲料（アイソカル100ml）が1日3本でており、毎日飲むことで栄養状態を保っていた。

食生活としては、とても質素なものとなっていた。



目的

対象者が好んで食べてもらえる食材を探し出し、食生活を豊かにすることを目的とした。

また、定期的に体重を測定して、体調や栄養状態の変化にも注目した。

対象

大和花子さま（仮名），90代，女性，要介護5
甲状腺機能低下症，アルツハイマー型認知症
11月1日BMI 20.23 体重43.1kg
（標準値BMI22 体重46.9kg）

取組

対象者や家族から聞き取りを行い、食べてもらえる品目を模索した。

体重を毎週日曜日に測定した。

（2020年11月1日～2021年1月31日）

効果・考察

「偏食」という入居前情報に対し、先入観をもっていただけから、消去法で食べられるメニューを選別していたことがわかった。

家族の情報により、精進料理などを参考にしながら馴染みのある食材を探し出し、食事の幅を少しでも広げる方向に今回の取り組みを進めていった。

結果、果物や梅干しくらいしか幅は広げることができていないが、様々な品目を提供することで食事は少し増えていた。栄養状態の改善とまでは言えないが、体重を少し標準値に近づけることができた。生活歴を調べるとそれは食の好みの問題ではなく、生活習慣の延長であることが分かった。食事以外にも、今回の偏食のように捉えてしまっている問題が他の生活者にもあるかもしれない。今回の経験を活かし、日々のケアの質の向上につなげていきたい。

倫理的配慮

対象者と家族に趣旨を口頭で説明し、個人が特定される形で発表しないことを伝え、同意を得た。

和里（にこり）香芝
天羽ユニット

個々のこだわりを重視

良い睡眠のためにできること
～生活者に合った尿取りパット選び～

背景

対象者は、最近の日中の様子をみると、うたた寝や臥床している時間が多くなっていた。本人からも「眠たい」との言葉もあり、夜間あまり休まれていない様子もみられていた。質の良い睡眠をとっていただくために、夜間の尿取りパット交換の回数と時間を変更した。就寝前の21時前後にトイレの声掛けを実施し、尿取りパットの交換回数は、23時・2時・5時の3回であった。以前に排尿痛や尿の色が濃く発熱がみられることもあったため、水分を多く飲むよう、飲み物をこまめに勧めていた。尿量が多く、特に起床時に尿漏れが見られていたため、ユニット内で話し合い、尿取りパット交換の回数を増やした。しかし、最近では23時の排尿がないこともあった。

目的

質の良い睡眠がとれるように、排せつの見直しから始めることを目的とした。



対象

五位堂太郎さま、70代、男性、要介護3
間質性肺炎、パーキンソン病
日中はトイレ支援、尿意あり、車椅子使用
夜間は尿取りパット交換
1日の水分量は1,200ml～1,600ml

取組

尿量測定を6月1日～6月7日に実施した。
尿取りパット交換回数を2回、時間を1時と5時に変更する。
変更後、尿量測定を6月19日～7月18日に実施した。

倫理的配慮

個人が特定されないように配慮し、個人に負担および不利益がないことを前提に実践発表に使用する旨を家族に伝え、了解を得た。

効果・考察

高齢になると、日中の活動量が低下するため、必要とする睡眠量も少なくなる。また、加齢に伴って、睡眠と関係の深い神経の働きや、ホルモンの分泌能力が衰えて睡眠時間が短くなる。

今回、排せつから見直しをおこなった結果から、尿取りパット交換の調整はできたが、睡眠の状態はあまり変わらなかった。

施設に入居する前だと、夜は比較的寝ておられたとのことなので、排せつ面ではさらに尿取りパットの種類変更、それに伴って交換の調整ができるのではないかと考える。

排せつ以外の見直しでは、日中の活動量を上げるために、車いす移動は見守りながら自身で自走したり、好きな将棋を空いた時間にするなど、今後の課題としたいと考える。

食器の色彩によって食事に及ぼす影響

背景

和里 里子さま(仮名)は、主食の白米は食べるが、副食はほとんど食べません。魚料理が好きだがというが残されており、いつも机に肘をつけて退屈そうに食べている。家族からいただいたお菓子を毎日食べていて、それが原因で食べられないのではないかと考えた。お菓子だけでは栄養バランスが偏ってしまう可能性がある。今回おかずをおいしく感じ、食事量を増やしてもらうため、食器の色を変え、おかずを提供することとした。

食べ物を食べる前に色や形などからその食べ物の情報を得る。特に色は、おいしさに与える影響が大きいと言われている。食器の色を変えることによって味が変化するとも言われている。

目的

今回は参考文献の中で一番変化が見られた白と赤を使用し、食事量の変化について調査することを目的とした。



対象

和里里子さま(仮名), 90代, 女性, 要介護4
白内障, 緑内障, 認知症日常生活自立度Ⅱb
食事形態は普通食, 料理を1品のみ代替として毎食後にフルーツ缶を提供。
食事動作は自立。

取組

12月20日～26日まで夕食に白の食器でおかず2品を提供し、26日に本人に白の食器に変えてどうだったかを聞き取る。
1月18日～24日まで夕食に赤の食器にしておかず2品を提供し、本人に赤の食器に変えてどうだったかを聞き取る。
食事量を10段階の目測を用いて平均を出す。

倫理的配慮

本人の家族に今回の件について説明し、個人情報および秘密保持を行うことで同意を得た。

効果・考察

白の食器を使った食事量, 赤の食器を使った食事量の平均と普段の食事量の平均を比較することで, 食器の色を変えた場合の食事量が25%増えたことが分かった。

また, 「普段の食器より赤の食器の方がいい」との声と赤の食器を使った食事量の結果から, おかずの色と食器の色とのグラデーションを考慮し提供することでより食事を楽しめることが考えられる。しかし, 好みではない肉料理は食器の色を変えても食事量の変化はみられなかった。

今回の実践内容で食器の色彩による食事量の変化はほとんど見られなかった。食器の色と食事量のみ着目したが, 今後はメニュー, 食器の形や大きさ, 本人の嗜好にも着目し, さまざまなおいしさの要因を分析することを課題としたい。

オンライン訪問の効果

背景

世界的に新型コロナウイルスが流行し、感染者は増加している。

日本全国に4月16日より緊急事態宣言が発令された。高齢者は、感染すると重症化しやすいため、厚生労働省老健局総務課認知症施策推進室より「高齢者施設等におかれては、新型コロナウイルスの感染経路の遮断という観点から、緊急やむを得ない場合を除き、ご家庭にしながらオンライン訪問を行っていただくことが望ましい」とある。

感染拡大防止のため、訪問規制を継続しているが、規制が長くなればなるほど、生活者、家族の精神状態が不安定になり、ストレスになっているのではないかと感じた。

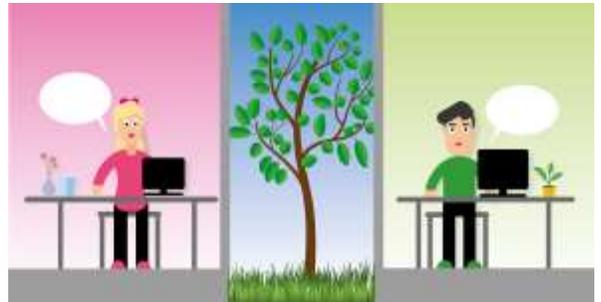
当ユニットでは、2月からショートステイ利用中の対象者が、5月頃より家族の訪問がないことから「家に帰りたい」「いつ、家に帰るの?」「明日、家に帰るように電話してほしい」「一旦、家に帰りお医者さんに行きたい」と不安の声を多く話されるようになった。

支援員としても、家族の気持ちを考えると、対象者が元気に過ごしているのかと心配になり、不安な日々を過ごしているのではないかと感じるようになった。

このような背景をもとに、当施設では無料通信アプリ（Skype）の導入が始まった。

目的

対象者と家族のオンライン訪問を実施することで、双方がどのように理解され、不安要素が減るのかヒアリングにて調査することを目的とした。



対象

万葉花子さま、女性、90代、認知症Ⅱb
虚血性心疾患、慢性心不全、骨粗鬆症、
アルツハイマー型認知症

効果・考察

オンライン訪問の調査結果から、対面のない長期間の訪問の規制は好ましくない対策とは考えにくいですが、コロナウイルスの終息の兆しが見えない以上、規制の継続は免れない。

また、他の感染症蔓延防止の観点からも効果的だと考える。

現在では、日本の各家庭でもWi-Fi環境普及率が70%前後となってきているため、オンライン訪問は規制解除後も継続していくことが望ましいと考える。

しかし、視覚、聴覚に障がいのある方に対しては、使用が難しく課題が残る。

端末を使用する時間帯の制約が緩和されたり、複数台の端末が整うことで、社員も気軽に使えるようになり、またビデオ通信に慣れていくことで、オンライン訪問に対する高齢者や家族の理解も深まっていくのではないかと考えられる。

取組

6月1日～6月22日、7月8日～7月21日、8月1日～8月31日までのショート利用中、1～2回のオンライン訪問（Skype）を実施し、対象者と家族にヒアリングを実施した。

倫理的配慮

趣旨および個人が特定できるような情報は記載しない旨を口頭で説明し、同意を得た。

デイサービスにおける音楽レクリエーション（体操）の取組 がもたらす発展性と考察

背景

地域密着型のデイサービスセンターとして、可能な限り自宅での生活の維持を図り、心身の機能維持または向上を目指している。

前回の実践発表では、身体機能低下からの転倒防止として、継続的な体操を重視し、体操に音楽を取り入れた「音楽レクリエーション（体操）」の効果と考察をおこなった。

音楽を取り入れることで、比較的有用な効果が認められる結果となり、音楽を取り入れたレクリエーションの発展が課題として残った。

今回は、その課題を引き継ぎ、「音楽レクリエーション（体操）」を発展させる取り組みをおこなった。

目的

音楽レクリエーション（体操）を多角的に、「最適化」すべき点もあわせて考慮し、包括的に考察することを目的とした。



対象

鎌田香さま（仮名）、80代、女性、要介護3
別所芝子さま（仮名）、90代、女性、要介護1
下田二郎さま（仮名）、80代、男性、要介護3
3名とも杖歩行、歩行不安定

取組

前回のヒアリングから変化があるか再度ヒアリングを実施した。

テレビでの体操終了後、社員による朝の体操（10：00～）に、施設内でCD機器を使い、音楽（唱歌・馴染みの曲）を流し、歌を唄いながら曲に合わせて体操を実施した。

期間後、再度ヒアリングを実施した。

倫理的配慮

対象者と家族に趣旨を口頭で説明。個人が特定される形での発表はしないことをお伝えし、同意を得た。

効果・考察

音楽レクリエーション（体操）を実施した際に、「音楽を聴いて昔を思い出した」「気分的にも楽しく身体を動かした」「一人ではできないことも皆と一緒にならできた」の言葉があり、身体以外にも、精神的にもよい効果があることが認められた。

ただし、「動きが複雑でわからない」など、個々の身体・精神的な違いにより、個別に対応することも必要だと思われる。音楽レクリエーション（体操）を円滑に実施するためには、音楽のテンポや長さを検討したり、動きが複雑でないかどうかの検討が必要である。

同じ動作の繰り返しや、タオルや新聞紙を丸め棒状にしたものを使い、わかりやすく、動きやすくするなどの最適化が必要と考える。

生活者の好みに応じたおやつを用意できる環境をつくるため
タブレット端末や新聞折込チラシを活用した嗜好調査を行う



背景

当施設では、生活者に一律のおやつを日替わりで提供している。

生活者一人ひとりの「嫌いなおやつ」については、都度代替品で対応しているが、反面、「好きなおやつ」を適切に提供できているかは不明瞭である。

そこで生活者が好むおやつを具体的に把握し、「生活者が好むおやつを用意できる環境づくり」を目指したいと考えた。

今回、過去ユニットでおやつを用意していた1ユニット（ショートステイ）に協力を依頼した。

18分類のカテゴリー

A群 (せんべい・あられ)	B群 (チョコレート菓子)	D群 (シュークリーム・エクレア)
C群 (スナック菓子)		F群 (ヨーグルト)
E群 (クッキー・ビスケット)		H群 (ゼリー)
G群 (プリン)		J群 (ケーキ菓子)
I群 (まんじゅう)		L群 (だんご)
K群 (ドーナツ)		N群 (キャンディ)
M群 (ナッツ)		P群 (パウムクーヘン・パウンドケーキ)
O群 (どら焼き・きんつば・たい焼き)		R群 (アイスクリーム)
Q群 (パイ・タルト)		

目的

生活者の好むおやつを知るためにタブレット端末（以下、タブレット）と新聞折込チラシ（以下、チラシ）を活用した嗜好調査を行った。



対象

香芝栄子さま

効果・考察

タブレットやチラシで商品画像を閲覧する過程で「これ好きや」と好みを教えてくれることにより確認できた。市場に流通するおやつの種類と比較すると、今回の調査時間内で閲覧できた数は極限られたものであり、得られた情報はその範囲内に限定されている。

追加調査は有益であるかもしれないが、管理栄養士だけではなく情報を共有するユニット支援員にも協力を依頼する方法もあるかもしれない。

タブレットではおやつをの画像を無尽蔵に表示できる。チラシは、情報量は少なくとも商用広告として見やすく整えられた情報が掲載されている。紙媒体で自発的に情報を得ることが容易で、扱いやすさではタブレットよりも優れていると感じられた。今後の調査では、まずチラシを使用して大まかな好みを教えてもらい、その後にタブレットを使用して詳しい内容を聞き取れば効率よく調査が行えるものと考えられる。

取組

7月23日にタブレット（iPad 第6世代）で画像を閲覧し、好みを確認する。

- ①18カテゴリーから好みを選ぶ。
- ②選んだ品目のGoogle検索を行い、Web上の画像を表示し、記録する。

9月11日にチラシを用意し、食べたいおやつを聞き取りを行う。

いずれも30分程度の聞き取りを行った。

倫理的配慮

個人を特定できるような情報は本稿に記載しない旨を口頭で説明し、ヒアリング結果を本稿で使用する同意を得た。

口腔ケアで口腔内を刺激して唾液分泌量を上げる

背景

当ユニットは10人中3人と、他ユニットと比べ経管栄養の生活者が多い時期があった。

誤嚥性肺炎を繰り返している方もおられ、予防として数種類の口腔ケア用品を使用したり、歯科往診を受けられている。

しかし、口腔ケア用品があっても、その方の口腔状態にあったケア方法を見つけることができなかつたり、歯科衛生士に指導された方法でケアを行なっても生活者が開口ににくいこともあり、ケアができていないのかわからないというのが実情である。

また、ガーゼで拭うのみの方もおられるが、歯科衛生士より、それでは不十分だが、やらないよりはよいと指摘がある。

経管栄養の方は、口内の刺激が少なく、そのため唾液の分泌量が下がっている。

また、唾液にはpHが存在し、唾液が充分に分泌されている方は、中性（6.8～7.0）または、アルカリ性だが、経管栄養の方は酸性に傾いていることが多いとされている。

唾液分泌量が少ないと唾液のもつ自浄作用が充分に機能せず、唾液pHが酸性に傾いていることは、歯を溶かしたり口臭を発生させやすい状態となる。

目的

口腔内を刺激することで、唾液量と質の改善を目的とした。



取り組みに使用したpH試験紙
（唾液pH測定時に使用）

対象

奈良鹿子さま（仮名）、女性、90代、経管栄養、認知症日常生活自立度Ⅳ、認知症、水分注入600ml

大和撫子さま（仮名）、女性、80代、経管栄養、認知症日常生活自立度Ⅳ、認知症、水分注入900ml

取組

口腔内の清掃の回数を増やす（起床時・昼食後・就寝時、7月16日～8月15日）

うがいやガーゼでの拭き取りに緑茶を使用する（8月1日～8月15日）

14～16時の間でサクソテストを行い、ガーゼに含まれた唾液をpH試験紙に浸み込ませて唾液pHを測定・記録する。

効果・考察

奈良さまに効果が見られなかったのは、ガーゼで拭うのみだったこと、また唾液腺の位置までは意識できていなかった可能性があり、そのため唾液腺を刺激できなかったと考えられる。

同様のことからサクソテスト実施時も歯がないため唾液腺を上手く刺激できなかったと考えられる。

8月から唾液量の減少が見られるのは、7月後半の平均気温が26.3度だったのに対して、8月前半の平均気温が29.7度と3.4度の気温差が生じたため、体内の水分減少が早くなった可能性がある。

大和さんは、唾液量は充分とはいえないが、唾液量は上昇傾向にある。奈良さんと比べ注入水分量が多いこと、楽しみでアイスを食べて口を動かしていたことで口が開きやすくなり、口腔ケアが行いやすくなったからと考えられる。歯科衛生士からも「口の開きがよくなった」と評価があった。

倫理的配慮

本発表にあたり、本人と家族に調査の趣旨を口頭で説明し、個人情報および、秘密保持を行うことで同意を得た。

汚染を減らして生活者の負担を減らしたい

背景

現在、当ユニットではアウターから衣類まで尿汚染、便汚染してしまう生活者が増えており、その生活者に対して、1日に5回以上、その内2回はアウターまで交換をしている日がある。

夜間の場合は、シーツや衣類が汚染することで、着替えやシーツ交換を行うため、睡眠の妨害、不快感を与え、生活者に対する負担が大きいと感じていた。

生活者の負担を少しでも減らしたいと考え、そのことをユニ・チャーム株式会社のケアアドバイザーに相談すると、1日のパット交換の回数を3~4回にして排せつ支援を行う回数を減らすことができると、生活者の負担を減らすことができると提案された。

目的

生活者への羞恥心の配慮、夜間の睡眠時間の確保、昼夜逆転の軽減を目的とした。



対象

村田華さま(仮名), 80代, 女性
認知症日常生活自立度Ⅳ, 平均飲水量1170ml
両下腿浮腫のため日中は着圧ソックス使用, 朝食後に利尿薬, 酸化マグネシウム錠2錠, 夕食後にセンノシド2錠服用。

取組

8月23日~1か月間の汚染回数を調べる。
11月1日~1か月間は夜3時・11時・20時の3回交換。

生活者の状態に合わせてパットの選定,
漏れがあればパットの当て方をユニット内で検討した。

倫理的配慮

本人, 家族に取り組みの説明と, 個人が特定される形では発表をしないことを説明し, 同意を得た。

効果・考察

汚染回数を調べると排せつ回数が4回のとときと比較してみたが, 変化はなかった。尿汚染しているのは夜3時で約700ml以上の日が多かったが, 使用していたパットの吸収量は1000mlで尿量がオーバーして漏れたのではなく, 身体状態に合ったパットの当て方ができていないため, 横漏れ, アウターに汚染したと考えられる。少量の排便で漏れたのはパットがうまく当てられていないのも要因の一つだと考えられる。横漏れが多いのは下剤の影響で便の形状が泥状便になっているため, パットの吸収口が塞がって汚染していると考えられる。

便汚染が10時以降から多かったのは下剤を服用して効果がでる時間帯だからだと考えられる。

排せつの汚染にしてもアウターの左足の付け根から漏れていたことが多かったのは身体が右に傾いていて, 右側から漏れないように右寄りにパットを当てていたため, 左側から漏れたと考えられる。

半構造化のヒヤリングを通して生活者の思いを知る

背景

対象者は、手足の震えがあるときに、居室、トイレで立ちにくい、食事前に震えが強くなるパーキンソン病の症状があった。

手伝おうとすると、「迷惑をかけたくない」といった内容のことを話したため、できるだけ自身でしていただけるように対応していた。

5月の病院受診時に、家族へユニットでの不満を話す。

その際に対象者が訴えた内容を家族が手紙にまとめ、ユニットへ渡される。

手紙には「不機嫌に対応されて怖い」「言ってもすぐにしてくれない」「人によっては言い方がきつい」「話を聞いてくれない」といった内容のことが書かれていた。

家族に改めて話していたことの内容を確認すると「話をしているのに聞いてくれない」「認知症の人と同じ対応をされる」と対象者が泣きながら言っていたので不安になったと話された。

ユニットではそれまで大きな問題はなく対応できていたと認識していたが、支援方法の認識に大きなずれがあったと気がついた。

目的

対象者の思いをヒヤリングし、ユニット内で共有および支援方法を見直す。そのことで、対象者の不満を少しでも解消することを目的とした。



対象

香具和子さま（仮名）、70代、女性、要介護4
パーキンソン病
意思疎通可能

効果・考察

取組

対象者に2項目のヒヤリングを実施する。

- ① 声掛けで嫌と思うことはどんなときですか？
- ② 対応で嫌と思うことはどんなときですか？

質問で得た情報をユニット社員で共有し、対応を実施する。

「パーキンソン病ってどんな病気？」の動画で病気の理解を深める。

聞きとりをはじめたときは、関係性を築けていなかった部分もあり、気持ちを隠そうとしている様子が見受けられた。3回目の質問をするときに、視線を合わせ、ゆっくりとした口調で「思っていることをそのまま話してください」と伝えると家族へ話された内容のことを話される。

具体的に話す、答えにくい様子があれば、時間をあける、分かりやすい説明を行うなどの対応で質問に答えやすくなったのではないかと考えられる。

支援員へ頼みごとをすることが増えたことから、関係性が築けてきたのではないかと考えられる。

対応や言葉づかいなどで不適切と思ったことは支援員同士で伝えるようになり、互いに注意しやすい環境になってきている。

会話の機会が増え、症状や生活リズムを把握しやすくなった。

倫理的配慮

本人と家族に内容を説明し、個人が特定される形では発表しないことを説明し同意を得た。

和里（にこり）

飛鳥ユニット

グエン・トゥ・トゥイ

和里（にこり）[®]に入職しての1年



和里（にこり）を選んだ理由、福祉に携わることにした理由

私は、ベトナムで医療関係の学校を卒業してから、自分の夢をもって日本に来ることを決めていました。本当は日本で看護師になりたかったのですが、途中で様々な事情があって、当初の目標には、最後まで進むことができなくなりました。しかし、医療に関わる仕事に就きたくて、両親に相談すると「おばあちゃんやおじいさんを世話する仕事はどうですか」と進めてもらい、介護福祉の専門学校に入学しました。和里（にこり）では、個人のプライバシーや尊厳を重視する理念・目的が掲げられ、生活者が自分らしい生活を実際に送られているのを見て、ここで働いてみたいと思い、就職することを決めました。

入職したときに感じた思い

入職したときは、大変緊張しました。学生から社会人になり、新しい職場・環境に戸惑い、また最初から始めなければならない、どうやって仕事を覚えるのか、どこから始めたらよいか。日本語も、まだまだ苦手な言葉を使ったらいいかと不安になっていました。しかし、飛鳥ユニットの先輩はいつも優しく話しかけてくれて、とても嬉しかったです。また、研修や仕事の合間などに、仕事の内容や和里（にこり）について、飛鳥ユニットの生活者のことなど、飛鳥ユニット支援員、事務所社員、生活者にも、たくさんの方に教えてもらうことができました。和里（にこり）に就職してよかったと思います。

3か月を過ぎて感じた思い

支援方法やコール番号、生活者の名前、食事の準備などを覚えられるか心配で、飛鳥の皆さんから支援しやすい、覚えやすい方法などを教えてもらいました。いつか一人で支援ができるようになるのかと考える日々でした。

リーダーはいつも声を掛けてくれて、何でも相談できるし、私の日本語の勉強でも応援してくれました。職場でも皆さんいつもゆっくりと優しい声で話しかけてくれました。もっと周りの人と関係を作っていきたいです。関係を築いていくと生活者も、私を受け入れてくれて、自分の孫のように話してくれるようになりました。

6か月が過ぎて感じた思い

早出3日目のことです。朝7時にある生活者が緊急搬送となりました。そのままユニットに戻れることはありませんでした。あのときにもう少し何かできなかったのだろうか…と後悔しています。あの日のことは一生忘れないと思います。しばらくは、早出をするのが怖くなり、不安でいっぱいでした。ただ、家族から「おばあちゃんをお世話してくれて、本当にありがとう」。同時に上司からも「トゥイさんがいつも話しかけ、親身にお手伝いしていたのを、ご家族もAさん自身も私たちも、ちゃんとわかっているから」という言葉をもらい、心が救われました。その日から、私は目の前にいる生活者へ、自分のできる範囲だけれど、精一杯のケアを行なっていくことを心に決めました。

9か月が過ぎて感じた思い

9か月が経ち、遅出の勤務をすることが決まりました。3回の同行、指導をしてもらったのですが、遅出は一人だけになる時間が長く、一人で勤務に入ったときは、生活者の対応にミスがあったらどうしよう、特に、緊急時の対応など、不安がいっぱいありました。もし、何かあったときに、一人で何もできなかったらと考えていました。リーダーと一緒に緊急時の出来事を考え、基礎となるマニュアルや対応を教えてもらいました。

2年目を迎えるこれからは

今もこの仕事に携わる中で、不安や心配はあります。また、同じように介護の仕事は大変、怖いと思っている方がいるかもしれませんが、それでも、私はこれからもいつも笑顔でいられる支援者であり続けたい。

誰でも不安や怖さを感じることはあります。誰でも自分の弱い部分に負けてしまうことがあります。ただ、私たちはそのたびに立ち上がり、前へ進むことができるのだと思います。

和里（にこり）
デイサービスセンター
加藤 基

和里（にこり）®に入職しての1年



和里（にこり）を選んだ理由、福祉に携わることにした理由

和里（にこり）を選んだ理由は、実習で病院と高齢者施設を体験し、高齢者施設が自分に合っていると思いました。それは自分の性格がおっとりしているからです。探していると『和里（にこり）®』という名前に惹かれ見学させていただきました。その時に説明を受け、研修体制が充実していること、また、先輩OTから色々な指導を受けることで自分が成長できる職場ではないかと思い、和里（にこり）®を選びました。福祉に携わることにした理由は、最初は自分のことを理解してくれている家族が勧めてくれたため、なんとなく専門学校に入ったのですが、実習に行き患者さんに感謝されたことや、バイザーに褒められたときにやりがいを感じ携わることになりました。

入職したときに感じた思い

デイサービスに配属が決まりました。

専門学校ではデイサービスの実習はなく、知識でしか知らなかったのが不安でしたが、先輩方や生活者の皆さんに優しく接してくださったので少し安心しました。

デイサービスでは毎日違う生活者が来られるので名前を覚えることや次になにをするのかの準備を考え、実行することが大変でした。

3か月を過ぎて感じた思い

自分が作業療法士の正社員として入社したことにより、個別機能訓練加算の算定ができるようになり、それとともに、書類作成が増えました。

また、在宅環境を知るため、送迎に同乗することになり、道を覚えることなどが大変でしたが、先輩方や介助員がフォローしてくださったので心強かったです。なにより、玄関の段差、手すりの位置など知ることができ、在宅生活に活かせる訓練を、と考えるようになりました。

6か月が過ぎて感じた思い

半年が過ぎて、生活者も自分の名前を覚えてくださったり気軽に話していただけたり、先輩方も緊張せず話せるようになったので輪に入れたように思い、うれしくなりました。

リハビリの準備や送迎にも慣れてきたころだったので、慣れてミスをしないように気を引き締めようと思っていました。

9か月が過ぎて感じた思い

最初に比べて不安がなくなったため、視野が広がったと思いました。排せつ支援などは実習でもしたことがなかったのですが、先輩からの指導や見て学びました。自宅のトイレがどのようなものか、知る機会は少ないですが、潜在能力を維持・向上できるように、自分なりに支援方法を考えるようになりました。

その反面、9か月だったので生活者と話すことに慣れてしまい、時々、敬語を使えていないことに気づきました。「親しき中にも礼儀あり」を忘れないようにしようと思いました。

2年目を迎えるこれからは

自分にはまだまだ知識や技術が足りません。

4月になると介護報酬改定により、内容が難しくなると思います。ですが、少しでも多く勉強をして、作業療法はもちろんのこと、在宅生活に役立てていき、慢心せずこれからも頑張っていきたいです。

和里（にこり）香芝
大和ユニット
グエン・トゥ・ハー
和里（にこり）[®]に入職しての1年



和里（にこり）を選んだ理由、福祉に携わることにした理由

専門学校のとときに友達から福祉の学校を進めてくれて福祉学校に入学しました。
卒業する前に学校の先生から和里（にこり）を勧められました。
和里（にこり）を見学したら、ここは職場でいろいろなことを学ぶことができると思い、就職することを決めました。

入職したときに感じた思い

外国人なので日本語が上手ではないので、緊張しました。
生活者の名前と日中流れのことは覚えることが難しかったです。時間はかかると思いますが、藤井リーダーや先輩が優しく仕事を教えてくれました。お風呂支援を観察して危険なところも伝えてくれました。そして一人の生活者のお風呂を担当することになりました。
2週間で仕事に慣れてきました。わからないことがあったらすぐ他の社員や事務所に聞くようにしました。

3か月を過ぎて感じた思い

生活者の1日の習慣がいろいろあってほしい覚ええました。間違えることもあり、他の社員さんはその都度教えてくれました。
7月の間に早出勤を初めました。藤井リーダーから“7時から11時までは一人で仕事をする”と言ってました。実際に実践すると、とても緊張感がありました。生活者の起床する時間は様々で、食事準備をすることや記録も多くて最初大変と思いましたが、頑張りました。

6か月が過ぎて感じた思い

10月から遅出勤が始まり、お風呂支援することは大変でした。お風呂の危険なところを注意しています。
夕方5時半から看護師はいないのでとても不安です。救急車を呼んだことはなく、生活者に何か起きたとき、緊張感があります。
他の社員には、わからないことがあればすぐ聞いてと言ってもらえて、安心して頑張っていきたいと思います。

9か月が過ぎて感じた思い

仕事にも慣れてきました。
早出、日勤、遅出にも慣れてきました。不安感としんどさもありますが、生活者の笑顔を見たら、気持ちが楽になることも多いので、これからも頑張りたいと思います。

2年目を迎えるこれからは

日本語もがんばって勉強します。
そして2年目から夜勤が始まることになりました。不安感と緊張感はまだありますが頑張ります。
藤井リーダーが伝えてくれたことをしっかりと頭に覚えていきます。



和里（にこり）を選んだ理由、福祉に携わることにした理由

介護福祉士として働いている友人に、日本の介護福祉業界は社員を必要としていると聞き、福祉の学校を勧めてもらい入学しました。

介護福祉専門学校を卒業してから就職活動に参加しました。そのとき、和里（にこり）が来られて、紹介してくれました。学校の先生にも、和里（にこり）を勧めてもらいました。生活者が自分らしい生活を送られていて、生活者のペースに合わせて個別ケアができると思い、就職することに決めました。

入職したときに感じた思い

慣れない環境で、日本語も上手くしゃべれないので、上手くやっていけるのかという不安もあり、とても緊張しました。でも、学校で学んだことを生かせるように頑張ろうと思いました。

3か月を過ぎて感じた思い

一人ひとりの生活者に合わせた支援方法のため、支援を覚えられるかが心配でした。わからないこともあったので、そのときはリーダーや周りのスタッフに教えてもらいました。まだわからないことがあります。最初に入ったときと比べると緊張感や不安な気持ちが少なくなり、だんだんと慣れてきています。

7月15日に早出を始めました。その時間一人で生活者の起床支援を行ったり、一人で任されるようになり、怖いと感じました。何か起きたときに適切な対応ができるのかも不安でした。

6か月が過ぎて感じた思い

わからないことはまだありますが、緊張感と不安な気持ちは少なくなり、気持ちが楽になりました。生活者の支援を行う際、少しずつ自信をもってできるようになりました。

遅出を始める際、最初の3日間はリーダーや周りにスタッフに指導してもらい、何か間違っていたら詳しく教えてもらうことができました。入浴支援を行うとき、リーダーに、入浴が一番危険なところだから注意することが必要と教えてもらいました。入浴支援の時間は一人での支援となるので注意しています。

9か月が過ぎて感じた思い

生活者の支援を合わせるように、一人ひとり生活者の性格や特徴を理解したり、日常支援をしたり、コミュニケーションを行うとき、観察することが必要であると思っていました。生活者の潜在能力を生かすため、生活者にできることをやってもらい、できないところを支援しています。

仕事で疲れるとイライラすることもあります。どんな仕事にもこのようなことはあると思うので、もっと頑張ろうと思っています。

2年目を迎えるこれからは

生活者が楽しい生活を送れるように、日本語をもっと頑張って勉強し、生活者の支援につなげたいと思います。また、工作中、もっと笑顔で支援を行いたいと思います。



